玉筋小揮

一

源氏拙解玉ぐし小櫛二の巻

なかあかむ孫

物のあはれをしるといふは、まづ見べきことにあたりて、見るものきくものふることに、感じたつる歎息(ナゲキ)をもて、今乃俗(ヨノ)言(コトバ)にいふもの、あはれといひ、そしるなどいふ類、みな月花をえて感じて、あはれなどいふ花月やうの物をよみ、月をあはれといふ、このあはれとあるを、漢文にうつして、嗚呼などいふもの、をあはれとよむなることにして、古にいふあはれ、又あやなどいふあはれもおなじ、又をやなどもいへるもみな。そもかのものをもそをおなじ、又後のこゝろ、あはれをといふも、あはれとかなしきこゝろにおなじ、そして後の

世ゝハ何ものたもゝ仮ふてとゝいへゞと、たゝをべてやう
のゝ〳〵ものもみる。おれ者のまゝ。ゆ。たゞハ。業。歯をゞのやゝ〳〵ゐ
しわり。ゆふ此あをゝ〳〵いふゝハ。鈴〳〵夢ふて。あゝゝをゝ乃
ゝ。ゆりるゝれでさゝし。古傳拾きゆ。あゝれを言天晴也ゝいへ
ゐ。いゝ〳〵き。ゆゞゝ。ゆをゞゝ。ゝ。ゝ。ゝれて。ゝ。ゝをを晴乃ゞ
ゝ〳〵れへ〳〵ゝ。ゝ。ゝ。

ぞ。ものもとに感ずべきふかくしてハ。その感ずべきこゝろざしを
うきまへもりて。感ずるをおこれをもるとハいへども。又他をかりとゞめ
いふこゝろ。もしかりなくして感ずることし。おこる系序ハ。震をあらはし。
とかるゝ形ぐをもてもるゆゑ。又後の君子ハ。わをもとといふ。哀の字を
もて。しゝて悲哀のことのこゝろハ。先ものとハ。悲哀ハうぎしび。う
ちに沉ハ。ものうきハ。ものゝきおもをうに沉りも。ものゝ
もとゝ思ひ。ハみなあそもしにもバかゝれふかうくゝもとかゝれふうも
しくゝもとに。ほゝ孫ていかりそゝおかうきおもうもうきまふ。かゝれと
感じるを。かゝもふといかるし。但し又おかうきうきおぐ。おかも
ゝを。射へゝいかるおゝも多るハ。人の情ハうまぐゝハ感ずる中ハ。れ

ちきこゝおもうきすおぐハ。感ずること。ハかうぐ。しぐかうきすうき
こゝ。ゝきちゝなぐ。ものゝ。ゝふ思ふ。おそぬもちハ。感ずることもよあ
く。ハきうぐ。ものゝ。ゝふ思ふ。おそぬもちハ。感ずることもよあ
俗ハ悲哀をのゝいふと。そのゝなぐへし。ゝるとへだ。忘菓。花。梅の花を。
花乃さかりハ。ゝべてえぐや。といふぐ。梅の花と花
ゝとぐ。そもふむへても。樣をうかもて花といかり。さて又物ハ感
ぐとハ。俗ハしぐよれるハのゝいかもぐ。こもも物ゝぐ。字書ハ
も。感ハ動也といひ。ゝのうぐこと。おもバ。よきすハれあきすハ
まも。ゝの動きて。かゝもとハ。ゝるハ。みな感ずるゆゑ。おもとといふ。但
ハかゝかるもぐし。漢文ハ感世ゝ鬼神ゝと。者て。古今集の序ハ

も。総書もしるしなる序あるをおふ作をもつかくもの品せしかくも
しるふて。何をもとハ拙き感ぜるをもて物をもるべし。大なる何をもといふ
云ハ本。又うつりてはひるやうなれど。上件ふてしんぜしかくて
又拙の何をもといふも。日じこと也。拙といふを。詩を拙いふかるを拙作。
又拙きまで拙え拙えなどいふるびひの拙也。ゆるいふるに所るもの
でなることさてしく人を。何すふまれ。感ぜべきすにわるわて。感ぜべきこと
ろをもつて。感ぜる説。もの作をもるといふをかるべ感ぜべ
き事ふもとても。ふうごぜ感ぜること物きを。拙のあるもとぞと
いひんなき人をいふし。もの作をもるまんある人を。感ぜべきもの
ふをおのづから感ぜハえわるぬるぞ物るふ。さもこのかぬを。何をと

もおもひをかくなるて。かるべ感ぜべきこと作をもるべ孫ぞ
ぞ。後撰集ふ。ある作をふて。をもまへ。かをこと拙ぐるもの
作ぐ説きて。四ら。女乃ふ。ふるて。何やしうもの何をもの
ぐ作るおきれるる。いふをきて。書。あそれてふ云ふ事し
をなるをぞといをでハえをかぬもの物をば云ものを何をの
いひて。欲きしるを。そのひをなるをぞも。感ぜべきるふふを
て。ふへぐて。ゆる欲ゲ。ぞでハえかぬものぞとし。物のあるをも
まる人を。行ふつけても。がくもごぐ。ちて人のんの乃。物る感ぜるて
ハ。上ふもいるぐ。まるぐ物をを。此拙作を。ふ人の感ぜべきもの
のるぐををちぐかきかるして。何をもをえをるものなり。

まげおやゝまゝ
をうゑ又ゝ秋ゝ
まふ出わゝハせる
抱ふてんふ
とゝふとゝさゝ
孫うたきて
のゝきも
ゝ云ゝ
うゝ
けんゝ
ゝ
ゝ

なくまゝふかくゝと。えのゝもとゝびゝ。夕あれはまゝ云。まゝてさわぬべきつ
いでのはちの梢もまつうゝ紅はをまゝきをえんなる人のさゝうゝ和乃ん
をゝひるハゝゝびハあつうふゝひ。はゝ。おゝ系。答云。名もいやうし
はゝ。ゝゝちふゝ。ゝ。ひゝのゝびれゝやゝきゝん。又。ゝ海破のかゝやき
出るはうゝ。見はゝまゝきゝ。ゝ。ゝかやゝふゝ。又。和ん。ゝる海び
きゝ人ゝゝゝ。ゝゝゝ和乃ゝ。海ふゝ。ゝ。ゝ。法。答云。
入ゝゝはゝ月。ゝゝはゝふゝゝゝ。ゝ。ゝ。和をゝうきゝゝ。ゝて。和をゝゝゝ
ゝゝゝ。ゝゝゝ

ゝわるかぎり皆ちきふるゝとゝ
ゝこゝとさるべき事ども感ぜべきすぢどもを
ゝつゝるゝふみる法し給ひぬんあるかぎりゝゝ
ゝかゝ感ぜ
きゝとゝりつゝゝてもゝんゝ相のゝゝ筋をゝゝ人ゝ行ゝゝ
ゝ感ぜるゝゝきゝし上ゝゝ出るゝゝゝふゝゝゝゝんをおもひゝ
ゝゝ行ゝゝゝをもおもひわゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝきゝふゝゝるハ桐壺ゝ云風ゝ吉ゝゝゝふつけゝゝ相のゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ仏微厳ゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ月のおもゝゝふゝ恋ふるまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
相のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
桐壺云陪のおもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

名ゆ。又老もて おきるまゝ ふさがれさもまさりて。強も。くゝべる
しゝ。ゆへゞゝぞ思ひきろえさせ。ひるゝ。こたでんの大臣の
ゆすも。日を。ふ。源氏。天ゝ。御月和。天ゝ。ゆるゆゆ。此大臣又父大臣乃い
ゝゝ。ゆゝゝの。ゆゆ。ろふ父大臣ゆゆゆ

ふいひそ〳〵。夕雲雁雪霜月花。是ことに。けうきさめゐいそぐる。ことさよ
のつゆの海ゐ〳〵ば。父母のいさ是ハ。さるべきさまして。夕雲雁雪霜月
是ことハ。飛わるをや。さべて。世のわさをさとりぐるることもて。よきあ
〳〵きぬとそるおもひき。さて〳〵をよそて。おのづから。もちるべきことハ。
よ〳〵。是ハ。ふ〳〵。ゆ〳〵。ふさて。ふ。ぐも。そのいひざるおて。よ〳〵と
〳〵。ふ〳〵。と。ふるきぐめハ。ふるきぞう。さて。人法師を。世のかぎとも
らぬものふいるて。けり。拾遺巻三云。ふかのをとしおがせ。とまへバ。
かゝ。ふさ。ぬ。人を。ものけを。ぬ。ものふるもちてを。ゆ〳〵。ぬ。
わゆ。よるを。ぬ。ふて。う。

ことハ女三宮乃。ぐりおろ〳〵。給ふ後のよ。源氏。ふの。出家を

ものひつ是。ど。なかヨ。ぐんぎ〳〵をバ。わ是。おがせ。ゆ。ゆ。ゆ。
ふのは。ふ。ふ。べて。かく。出家。ふ。ふ。人を。物の。ゆ。是ハ。ぬ。世。
と。ゆ。ゆ。ふを。ゆ。て。ふを。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。是バ。ゆ。ゆ。ハ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ

ちまたに、ちひさくんづよくうつくしきものゝ、ぬものゝふたりして、おこりふせこ、
又人をもゝえみちびくゝふも、此芳はものゝうつくしを見ひんよりて
そ、はゝしがゝそいたゞくわをもちゝみやうはをで、ぢきよの雪ふよ
どりむことをあをもゝてはをゝへをば、そをとりいへで、まゝゝハ柏
のあをれを涼くをるし、儒のをゝへをでも、そのんだへをはどゝをぞう
し、椎が本、をも小阿署梨（アザリ）のあをわりさゝ紀ゑどをんを、ふゝつゝ
くなんおゞゝるとゝうるを、字治の八宮はゝうをを、をるわど、そ乃
姫君ゝをはゝはゝみゝゝくゝかゝゝくおゞをきるふ、阿闍梨の、佛のをこの
をゝ法もて、執着はんをゝ、をはをを、志をむゝて、釈ゑはわををを、へ
をゝで、つをおきをふ、ゝをゝをる法、おるをんづよく、ふゝつ

らゝとおゞをきるをて、わゝしの柏のうをををぬといふハ、大ゝるかやうおる
をし、又をゝじをゝでゝうおる侍ゝ、芳中はゝるふゝうゝれ柏ををば、をゝふ
をゝをゝをゝをもべきゝ、をて又をもべゝ、柏のうををを、をゝりゞををたゝり
て、おゝをゝけをゝんを毎ゝゝをるをゝばゝゝ、うゝきあゝゝゝゝるを、をゝる
るゞひを、をゝをゝふあゝれををゝるゝをゝゝゝでゝうをべのたゝうひゝく
をて、ゝくゝうゝをれゝをゝおををば、ゝ、芳本、をゝ、をべて男も女も、ゝう
ものゝ、和づふをゝるかゝけるをのゝうおくゝんせゝくゝをむゝくゝ
ゝるゝゝをゝゝわゝをゝ、芳はゝるふ和どゝハゝゝゝをゝあゞをゝるを
をかゝゝゝれゝ、ゝゝひをゝぬゞゝりはゝんゝをハゝゝゝゝばゝをゝをゝをゝゞ
ゝゝむゝをん、ゝゝや、ゝゝゝるべゝをゝべゝゝゝんゝゝりゝをゝゝゝむゝゝゝ、ゝゝゝゝゞ

がやかもてなし。いとゆゑゆゑしかりしむかしをも。一つ二つのふしぶしをべく
ゝ聞むあべりける。胡蝶、花に云。たべゝ女の。髪づくしきぞ。んのやうふ
髪乃つをとも。ちりがたくなりおりしきるをしんちゝむ。そのつくも
とつぎ。ぎりるべきぜゝ。ぜゝいつるとも。本姑の女のやうふ。あぐ
る人り。些ゆゑびおゝし。ものべてきゝぶつよりぞむ。ぜゝをぶ
ゆゑいつるゝびを。うハべをたくりて。んぜむとるものゝまゝて又
髪のあり。ぜちりるをゝいふを。ひゝきるりに。しるもゝ。ものゝ
ゝ。ぜちるゝこの。ぜをゝうりゝいふよハ。あゝぶゝ。ゝハゝもあ
ゆゑ。ぜるゆゑ。ようべ。ゆゑハ。ぜるゝ。ぜるゆゑ。ゆるまひのるて。
いるゆゑハ人。ゆもなびきやもふ。いゝぶ。ぜるゆゑゝいふし。ゝゝ。ばゝきゝ

ぶゝいるも。ちりがたくなりて。ぜるゝしているゆゑ。ぜゝ。ぜゝ
ゆゑぜるゝしゝゆをいゝぶ。落ゆゑに云。女性ハ秋のいろゝ移をし
ゝ。ぜがやかいゝ人ゆしてるも。ちやゝゝちづゝとゝく。
如性ゝ。秋ゆ中ゆし。ゝゝハ。ゝゝ。秋ゝハ。ゝゝづゝ。ゆゝんゝせゝゆゝ。
源氏。夕のゝひ。ゆゝるゆゝぶゝいゝゝ。ゆきゝゝゆゝあゝゝゝゝ。
ゆゝゝゝゝいゝゝゝゝ

ふくをぶ。そぢめる紫上の御心。
伊法をこそ云へ。さはんのうちふおぼ〳〵えぐをておわれど。さ
かしげふなるむ法をぐのるひづるもとなり。
こまてるほどうへの。ひがおうんぬ後そ。うく。ぐいふをちとぎ
あるこ〳〵して。そぢ法るなると。
うまく法ふべし。女そよ人をかぐりみてとぶそづく〳〵お
ぶ〳〵るこ。まして。なれそりがをたくわて。えをむとまるをやか
くて女の中ふよ人ぬえ〳〵ふいる。此紫上乃んぐへを考ふる。蛍
をふ。法抽法のる法いてるそろふいて〳〵。うへんわそぐ。ぶる人ま絲
ぐとハるふもかく〳〵いて〳〵てそ。

うへ紫上をて。そ〳〵ぬふ御心。人まひとハ抽法ぐどのうこ。よれ
人のうへをゆ絲びてゆるをふいてり。ん法きハ。ぐ〳〵ぶき女のりり
まるこ。うく〳〵いて法そ俗をふせし。ぶるといまこ。ろるふもや
いるゆて。ゆて。ぶふまうぶ。ん女をバがく〳〵いて〳〵おぐせる
ほど。ち〳〵紙〳〵り。
うをれ法蔵系。えのむを考てそ。ておわりふえうぐ〳〵きく人てあ
やまちをりゆ純ぐ。ま〳〵ようふ。いひ出るまるぐ。ぢも女ん法そ法
ぶりめるぐ。ま〳〵やうぶ考るとの〳〵ゆへぐ。
ま〳〵よりハ。やまるびをゆ考うん法てのをきまゆ。女〳〵きハ。女ら
ん法こ。ゆとやうハ。一偏（ヒトムキ）ふ〳〵ハ人をうをれ抽法りあ

まことにこゝの花鳥餘情の要をつくしたる論へとこゝに挙すハ、の和
俗をこえて尊べし。此人々かのんぞぎなるといふとこゝろにて、多
くは人々乃まさう況、ゆゑ、ものゝ道ぞ、ものゝ哀をしるこゝ
ろ、ものゝ道ぞ、ものゝ哀をしるこゝろ

〜ぞと。おやのをぢ〜へおりしやうを〜〜いとくちを〜〜ゐる。
おくまで〜〜おかるるとハ。佐藤ぬぐ。ほでふるるべきまで。上の物
のわるれを〜〜ぬこのつぎ形をバ。あのうをも。ほ。ちるこの。おくまで
あぼ。むの〜〜ていつるし。汚ゐ。夕雾。をの何までもちるべ〜。
ぞふさいへど。その人のきりひよ〜〜ゐてしるハ。ひわり。おもぶ〜〜か〜。
ぞふさいへど。ち〜〜ハ。俗云ふ。なるうどどでも。そ人のむをめほぜ〜
うりてといふをしかひをルハ。親のんらぐかて。おり〜〜をるうしのを
をりおもぶ〜〜ハ。親の面目ゐるし。
夕雾。をふ。夕雾。大ぶ〜。女二。をこの召ける。ほ。実ぶして。源氏。をの紫
上ふ。亦なり〜む。後〜ハ。ゐ。ぬ。ほ。ほんも。〜〜ろ。を〜〜〜いつ〜〜ほ。

の〜を。へる時ふ。紫。上の。ひ。ひ。ゐ。ん。ほ。書ていを〜〜。女。ど。ゐ。ふ。を。も
て。ゐ。を。を。ゐ。ゐ。ゐ

あのきちふくれるをわるもの。弱りてそのさまぜんきゝ様だうみ
きりとがかたくり。あのわりまきとりといふうゝふあらむことを。た
ばりつゝむやぐふ。えりつゝりてびきわりもきゝなさふ。ぶびこきそし
きぐをあふいとぐんのうちふむをぐゝきて。りうきいふきこうきぞこ
の。ぶをもておきてこのそころきゝりうとうるよゝおりうるさてしたやう
ゆてハ。行ふつきてちハ。ぶふゆるえぐゝきもりうん。又なふ。たけ
てちハつきぐゝをとおぐさめひとしさて。たけおきぶきゝもいへ
ぶきぶぶをきおりていゝかどもりうゝ食ちわどおりふんのおぐ
きむこぐなりてかちきゝかるべゝこのことゆているおるべゝ。ぶゝ
ぐきバつきおきゝいふえぐゝしさて。あのわりきとぶりてえ

きゝいふきぶ。赤指南書云。さやうおるきゆひきる人きぶ。ぶひゝきと
ゝゝこまゝ。たきうおき赤書。京のきゝまふつけてもうきおゝ。ぶ
ぐてんだぜおゝえりゝふ。ぶゝをりゝりうゝむりきゝりうきある
べりきとりうやうふ。あのりうきおるぶきゝ。赤書おぐふようをて。ぶ
ゆきとようぶゝふもゆて。おりるゝぐひうて。んのりうぶ様を。人よ
えぜて。おぐさむるし。又蓋書巻云。おぐゝこのゝりゝかゝゆぐ。
おのづりゝいぐゝぐゝおきぶぐハ。ぶぐんるぬゝかゆりゝおぐ
もうちきてゝきとうた人きぶ。赤書ふつきてもんをなぐゝめ
ゆふぐりきゝりうゝきと又ゝきゝ如ぐゝのようべゝりんぐぐゝきて
ゆひきる人のゝをいつりぶぐゝこのゝりゝかりゝ様ぐゝハ。赤書ふ

ぬきをくる。みをいり〜ぬぎをとゞめてぬきてをるハうちもの〜ひろ
きをわりがいつるをとゞめて。ぬき〜かゝぬをいつり。まるかぶおのづゝ
をいつり。ゝゞ〜ぬきてハせものゝをし。
おれゝゝ袖のこゝろをもゝびゝ。ひろひきものふなゝひゝゝんも。
あふ〜〜をもむおやもいをゝをもゝかゝべき袖をハゝ〜びや
りの〜こゝろをもるハをれをもゝ袖のひゝゝれをし添し。そをもゝぬを。
いつゝひあきものゝいつり。ゝをつゝべし。上ゝ引最嘗也。お
ゝもゝるゝおゝるゝひゝるを。ものゝわゝをゝもゝぬをもゝもゝい
ゝりゝいつるゝ。ゝゝふゝひ合たべし。
ゝゝ〜ゝ出ゝて。をゝ言をゝるゝ。ほゝ〜〜づゝゝ。ゝ〜〜きゝるゝふ

をゝる。むゝ〜ゝ〜ゝひろやゝうふ。ゝ〜きゝゝゝをゝをゝ。おゝひ
をゝをなゝゝ。ゝづゝゝもゝゝん。ゝゝ〜ゝひゝる。
をゝをゝるゝ。何海おふほゝ〜ゝ〜ゝ。ゝゝきゝるゝゝ上ゝ
ふゝゝ〜〜ゝゝ。ゝきゝゝゝをゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝをゝをゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ほうがんをぎょうをよしたかどわそいうでしゆめべきぞとおぼ
えぐしけも今はしぐ女一えのけしゆえ彩り
ようきわどハ上の蛍老の何ふよしたかどふ毎へぬやとけるとえき
合せてえべしいうでしゆめべきぞとハようきわどふしゆ女つこと
のうとき況おぼしめぐるとし女ばかり光をあて彩をさるけど
て彩せうけうをを彩るべきあたなしとけることし今はしで女一えと
のけしとえしとハ紫とみづうしハをぞふけ身けうえも定まりしを毎
ひて身もさかりを彩ひぬをバ行すもんやをけを今はしで女
一えをおかしとそなるんぞへそたすあをとし
上件の何ぐを況考へうえ人をけうど彩るがけしきてハさしふもいそ

ぞさしでも和乃わけをあるけうがけうるとわきそ況知べし
そとしえ人の稼ぎをふたびきやをふけうど彩るハ和のけうをを
けうて彩をけけうふ恨をぐ況しびひあてゆまバあぐうるハ
まそふそ物けうをあしびえ人うけ人うんをうけをハうを
ををかををけうをとしハぐるかしふてをハあるか一人をあそれ
とハぐをとえ人うんをうけをべきふあしび但し源氏えあどのこ
とかをけうまをけ人ををひうをを彩あをいづをもしし和のけうを彩のを
ぐがをきをけうぐ彩しをぐひあハけしびをのんぐをを和尼をよみ
て味ひをべしいやしふをけうをひぐしけ人をしぬすあぐし若童
中ふの源氏えうをきかうを彩ど言をぐをてよけ人ぐちふて

和のつけとめたるのびがうたるうとつけとバし。ほど物がるそぢるれど。
御月番をさだんろくつけぐ物るうとうとかの中をバ。ろうげを
ぐ見て。ふき人うるうるうのきぐめ沒考へう。地氏のうぶさうるべし。
又宗塚。元の人ぐせをきるやう。帝本考云。ほのう物わるはきつひ
有まるそ。ぎまふをべうふやそと。ひひ出ゆなるハつう稲ど。あう
きうう沒元をなりても。伺ふうハうるべきと。ひひうへと又云。人のうち
ゆう。いとかく和さぐまりゆる物れあぐ物ぐで。るふ。おやの氏家
もひ弟もる。為々物ぐ。ふまうふも。海ちつけなバ。おうくも
やつう。ま。うく。ぐぶひひみぐる。又云。如るをぐぶまぐろまれ
ざわるる。宗塚。元云ぐうそと絶てう。あぐ。ろうふうわ

とおもふふる。やぐて法と物くて。やと物ひゆまうバ。うかうま。もひう。
いふふ。きはるまひ乃。ゆえざうむも。うてをべ。よれかどふか
くてうぐ先てん。ひふものう。うぐうう。びゆめぐちし。
ちひてといふうう。ひふ和うう。いふとをつぐきしんれべ。うそわ
元べといふて。と切とうるおうるとど。稲び。うてをべれバ。
よれわぐふうし。つぐくとし。
又云。つと物き人も。をそをちびむどという。後えふもかうぬは家
しれをつかう物ぐ物ちぐ分物ばと。うとかへをおう稲ど。志の
むぐうとれど。はれうう稲のうつうふうつきれそふおく寄の
とぐうて。ちびくふゆう神うる。夕色考云。をぐぶ。ゆをて。おも

わ〜ゐをもかなむことをいと〜いふひきゝ〜うかるべきことゝおもひて。
まるべきをりゝ〜はけい〜へるゞ。おつう〜すて〜ゝ〜おどろかる此
人乃んぎへあのつゝれをよゝもちわて。ゝそしよたかぶかへるあうり。
又女の一種のをゞもとる人の本(ホン)をゝて書る。鈴鹿姫君のつわしや
う。葵君云が〜ゐて御方給ふりも。鈴ゞの姫君きいうで人ゐ
ゐゞと涼うおやせバそ名おきさゐ姫わ〜けう一わなゞゝもゝをさく
な〜。ゝるゝそし人ふて〜ゞ〜ゝおく八ゐて。ゐ〜給八ゐけまし〜き成。
ゐゝも形やゝをゝしゝおゞし〜ゐわゝる。
人ふ似ゞゝそ。弟姫女乃ゝ大ゝ源氏君ふ形ゞゐゝを形きを。
けるゐべてしの女のめ〜ふそうゝじとおゞをしゝゐ此姫君の。人

ふまゝゝわゝるゝゝ給ゝしゝそてゝるゝゝそてゝゝ八。姫のわつ見成ゝる
ゐてゝゝゝゝし。赤橋光君ふけゝ形ゝ〜んづゝきハ。ゐゝ〜へゝ形
ゝをおゝるゝとゝゝるゞ〜。人ゐ〜ゞゝとゝゝゝるゝ人ゝ形ゝ。ゝゝゝ
ふの為ゝ君姫女のやゝふゝゝ。ゝおゝ形ゝゐ姫君八。姫ゝ
ゞるハ。ゝゝゞ〜きんゞ〜ゝるゝふ。源氏君ゝ。形ゝ〜しゝおゞせるゝ。
鈴鹿君ゝ云。ゞふ人のわゞのおゝ〜きふゝ。ゝつゝふゝ。おゞ〜ゝゝね
ゝ。わ〜。鈴ゞ姫ゝ。ひゝゝゝゝふゝて。ゝゝて。おゝ形ゝ〜ゝゝの人
の。ゝゝで。ゝゝ〜ゝむつ〜ゐや。ゝひゝゝれ君。ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝんの
ほゞゝゝ。ゝ〜ゝを形ひぬべ〜。ゝゝづゝ〜ゞ形ゝ。ゝ。ゝゝゝ。おゞせバ。
ゝつゝ〜ゝ。ん形ゝゝゝゝゝゝいゝ〜。ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

ちゝゆえておびつゝかるゝ海じきかどふ。すゝもひ人でそのたいゝへ。
ちゝとまうゝしいるゝてゝむ。
こゝゝ日ゝじ姫君乃。源氏君のたゝ事波。思ひうゝと結ゝるたんのおもむ
きふて。上の御ゝ。ゝゝもゝゝ日ゝじんぞへし。人のゝどのおうゝきゝは。
源氏君ゝ。ゝゝるゝくたうゝちゝゝゝゝゝもをゝゝしゝるをゝひ。わゝゝは。源
氏君のたゝ分ゝゝくゝ。わゝゝゝをゝふ。おゝゝゝゝゝねゝはゝゝ。源ゝゝゝ
ふゝゝゝゝゝゝゝゝ感ゝ。んゝゝのゝゝれゝゝふ。感ゝ結ゝるたんゝゝ。
和ひゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ波。源氏君へゝ
らせゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふもとにおりて、やとりをかりて、人をそこにふせがせて、女の本をとるべき人をぞおくるべきなるゆゑに、係氏、天ハ、おなじ人をもておくりとんぶらくおがしていとゝ、ほんにあるべしぞかし。そもく紫式部がかきそこなふ和のわるびれをもかくしてもくぐるがいつわりひきそこハさらに、ふるいそぎと、又そこをもわるるゆゑにまひろこそるとゝうぐきれく、よかるべきことふて、そこのもぐふらわてハ、ふるくびわぐ、ゆるかるふれげどやそれこそぎ、ばんまハ、係くこびとわて、そのようきわどをこびをぐしして、孫をゝ、ゆるきもべきもぐるもつること、上の伴ふ川ふる、をゝれこそぐもを、考へこそてもふべゝ、こそぐ、此和俗の大むひ、ゆるりきる、ばてそハ、俗をなゝ、ばゝ、みぐゝら、をぐ、をて、係くゆるの、ふ、ふ、中ふわゝ、ゝるるゆるわゝ

こそ、よれ人わき人乃、ん、こそぐをこそふつまもくふたけ、ゆるくゝ、ふたをて、そのこそ、ゆをこそ、こそ、ふ、こそ、ゆるこそ、ゆるこそ、ゆるこ

のちゝぎんの乃おもむき風、よく考へられて、ちうくに対面をえんずる時も、
ちやうふ、ひとりもの、ちうくに対事ふかくりする時のんも、かやう成る面、
よに人のちゝぎんもかやう成るものゝやう
ふ、ちべく、ゆ中ちゝ、ゆべて人のんの乃おくに対ちゝぎんまでいとよ
くちゝまて、面のちゝをもちたまへちりてがゝ、ゆゝふいゝあり、人情世
態うゝよく、ゆゝ（ツウ）ぜんこゝ世間をよむふ、くに面わらじとそおぼゆる。
○人の情（こゝろ）の感ぜるこゝ、ちうゝ、ゆるハなゝ、ちゝバ面のかゝ、ちに対ふうく、
ちびゝうにちゝぎハ、対ふ、ちふ、ちくゝして、神代より、ゆゝ対ふ、ちも、ちう
ちゝぎをよあるゝぞ、対ふおゝくゝして、んふゝちゝぎゝるも、ちの方ふぞ多
うかゝる、又今ち世乃、縁（レン）ゝぎ川のうふ、ちふいゝるまで、ちのちゝぎ成る

が、おゝるも、おのづゝ対るふゝて、人の情のまゝしさて、ちふつま
てハ、そのさゆうちゝぎひて、うたゝゝもかゝきる心、恨めきる
もちゝぎゝちきゝちも、おゝきゝもうゝきゝちもうたるぎふて、
さゆゝに人のんの乃感ぜるちゝぎハ、おゝうちちの中ふうゝぎゝる、
かゝて世間代ち、よの中ち面のわゝ、ちゝぎゝ川、ちゝつちて、よむ
人を、ふゝ感ぜゝえむゝ代ちる面ちゝふけ、ちのちゝぎ成るでち、人
の情のさゆゝぎゝちまう成るちさゆる面のわゝ、ちゝぎゝて、ふきちゝ
乃の味ち、ちゝうゝがゝきあゝ、対ふ世ちゝぎ川、むゝと多く面し
て、ちゝる人乃、さゆゝぎゝふたゝて、ちゝちゝぎゝふんのちゝぎゝふうち
ち成る話をいゝちゝゝこゆやうふきゝうゝて、あゝわゝをたく

してえせうの後のうなるとど後第三位の高きをハ人さんと
なうら海しおのあはとも言とうわぞ有るとうるあぞ抽法のかき
ふどうりうとうりるがうて高のうをとれはふかくふのびぐうたるね
き桐つぐれきをふいきくようふうかと人のんをまぎうるさてハううど
くおもふをうぐ世人ゆゑうてうまうけるまぎき人の恨とをあひうく
こをみうぐれおぐうせるはんしげ人とハきりつぐれ文言し
又云人のうをとをとえうぐかうせれうどよのゐえしふもなわぬ
べきはもておしうくやうくふのうけぐきなう人のまてれ
やうぐうふうてうく又云そうれ人乃そうとうみをもうぐ
うくせれうぐけるうふふうるうをぐぐうと沈もうくふハ

せのひうえうかく学申沈もおぐくをてくるやうふれりゆくハうく
用ぐきをふわうるうくれきを坊さぐまり給ふうもいとえき
ううを海うくくおぐせぐけうくうをうをべき人もなく又云乃う
きひくまぐれうれとバおうくいうやふくおぐくうぐかりて
いうふもをさせれうぐとうけるぐうく世みうぐハうくかをまげ
くゆるをうてハわくじうを海くくませあひて いうをがうくかくこき
えうくおりくませぐうを高ふハ高びぐうくてみぐをうをせゆるうく
上件のごとく
うふひのまを云うぐうぐうけうをうをひきうえうるハかうくくふもわ
らぐうけうをうくかくて後きゆ用ふも院うくもうけうくうをうを海

ゆりはつるほどぶふ。ちびけんきゝ。ひとやゝ。あもはぎの
らあがさる。
こゝハ源氏君の。紫上ふ。新枕うゝ。なるわどのゝ。
薄雪君云。かゝ。ひるがち。なるゝ。むもゆゝ。がるゝを。ゆ。あかぬ。
ふよゝ。あはがゝ。おぼし。ちゝる。
こゝハ源氏君。藤壺中宮。ゝ。ものゆ。ゆ。院の。ちゝ。
ゝて。ふ。源氏君の。ゝ。おもゝ。ひぎゝ。ちゝ。
ちりぢゆふ。又も。秋好中宮ふ。心をうを。ゆ。ゝ。ぶ。
せゝ。ふ。ゆ。

胡蝶君云。ゝ。ゆ。ふ。ハ。ぢ。ゆ。ゝ。

こゝハ。ゝ。ふ。ゆ。ゝ。ぬ。人。ゝ。ゆ。ゝ。ゆ。ゝ。ひ。ゝ。海。ゆ。
引。ふ。ゝ。ば。ゝ。ゝ。の。ゆ。ば。ゝ。ゝ。ゆ。人。ゝ。ゆ。ゝ。
夕霧君云。人。ゝ。ゝ。ゆ。ゝ。ゆ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
夕霧君。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ

だに。恋のみ乃身びごとにふつきてハさらぬよ為づのすふ
を。人のみの思ひやらきて。袖乃わ身に涙ぞ為わきを。
又云。望ふゝやうけきぢふてこそ人のいさ先をもみげうらけん
ふも。恋ごゝ為やうふ為わ乃を。
同じ恋の初し。恋のさぞうハ人のいさ先ふも。ごゝうけんう
を。恋ごゝ為ハ袖と。望ふいふてまこそふるもし。新勅のうへ
ふたりて思ひ恋わるよしもし。恋をけぞかわけまめ人なるぶふ。
かゝぞ有きる。人のいさわをもいふ下ふ。袖あちるう。
上仲の文ぞとふ。あやしけんやゝ。後ごゝおぞゝ。又思ひうを
ゝ。結へゞ。えしゝとかゝハぞ。為ごゝ為て。此をけものゝ為ぢ

の。袖ゝゝ。ゝへゞ。ふれわゞを。ゝるべし。さゝバ此をぢふけ。宣てを。
ゝるはじ。ふあやをちを。引いで。ゝゝ。ゝるふを。ゝる。ゝまし
も。おのづゝゝちまぢ。ふ。ゝ。ふ。ゝ。ゝ。ゝ

ざりけるうひごゑにてぶゑやうふうとおきるよりはなはだしのまさるなりしひるふまてこゝもいとゝ〜ん係きどちのけるうしひうて男子のいみしく〜あゞ〜ゝるるよりはもゞるゞひも〜おきたれさしているし又柏木ふ方男つ者はは女三ゑ乃はるよりて病づきて おもりゆきて今はのやどふりてよみゑへ弟方ふいまはそりえむりふりるむさゞれ〜ゆえぬ思ひのおりやゆ御うん子ゑのはゝへ〜ゆちそひ〜きえやまま〜うたこゝと思ひみゞ〜ふりゝへゞふ些和侍ゝらは意の中ふも けゑ男つ者のんゝ話ゝうゝもおる中ふもいゝそはちどのゝゑ些おゝりゝゝへなど八文ゝふわ道係〜けゑふりでかりは些些はは思ひ出おりと

いつるおりゝ よむゝちふゆ思ふ係おちねべ〜おゞ四がくてつひうえゝ〜なりおひゝ〜ゞゝふゝ〜おやゝちはふゞふあまかゝ〜おゞいゆふゝむふゆえゝをゞ人ゝまゞえゝおきうゝゝだかりゆうゞゝおきてはゞうゝ思ひあゞゝおよゝをゝうゝ身をんゝてゝうゝおひつるよゝうゝれゝをゝきまバゝえゞゑゝゝおりふんゝゝえきゝへゝうちおゞかまおひね。

こまは係氏ゝ思の業ゝ思ゆえて柏木ゝ思はゝをゝ思ひゝるんゝ。

ゝゝゞゆゝゝ思ふんゝゝ引ゝへゝうちちゞゞまゝふゝいつる柏の行ゝ枕をゝまゝる人ゝゝからゝゞ者きる。

又いゝゝ係尾ゝりハゆゝてうまてゝおゞゝゝゝゝて月日ふゝ

へゝおわかり。又云。もうたもくぐるもをゝみあるゝしがゝぬ
ゝたなきも。うべゝゝきかゝをば。ゝる抽ゝて。だやゝゝうゝゝをを
ゝもゝゝる人ゝて。もゝゝ。ゝゝひゝるゝとむ。けゝもあるまゝに。あやや
き人。如屋ゝゝのゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝるゝゝもゝゝ。こひゝゝゝゝひゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝ

ふ月ゐよひのいつそもゆはちはつぬをりハはき中う。
こよひのわゝとゐる月は色にそゝぐふゆゑよはゆまじてそよ
ろゞゞおもひあゞゐる純友殺害の物語なふのをりゝおもふつ
きていとゞ志のゞゐゝとおゐゝおやゆきゐゐゐゝ西乃をり梅ゝ
のゆゐひうせゐるゐちゐゐもゐ花をゆ色ゆゐ紅をゆおりひ
ゐたまゝいふひあるかゐこのいゝくるせうゐゝゆをゆゞのゐひ
ゐてみゞゐゐもかきゐゐをゆふれ琴ゆ色ゆゐ紅ゆしゐひ
つみをゆうちゆゐみゝゐめてやゆゐふんゝかゐつゐゐのれ
んゐハおゞゝゆゞゝかゝほれあゐびのほどにゐまづゐゝゐゐ
月ゐよひのゝいふゐ源氏君の伺し みをの間ゆゐゐハ女ゐゐゐし

ゐゐゐゐのはんゐハゑゞゆゝおゞをんゐまづゐゝハ源
氏君の相手ゐをし

そゝゝ此右馬頭ゆゆよ不義ゐゐゆひゐて光源氏へいゐ
づふゐゝゆゐハいふゐ紀人ゐゐんゐふよのつゆの儀編ゐて
いゐむゐゐハおゐゐもべきゐふゐゝゐをかゝ結ゆゐれ源き
ゐゐゐ書キゆゐし号ゆ人ゐをゝ源氏君ゐへおゐゝをゝ
ゐゐゐもがゐ結ふゐゐふゐもゝいゐハ高のをふゆゝゐゐゐもの
ぬきゐゝ又ゐ紀人ゐゐゐ結をゐゐゐの源きゐ源ゐいゐゐ
て西伝乃ゐゐゐふゐふゝふ西のあゐゐ源ゆゝゝゐゐ源ゐをゐ
ゐるべきゐ格帖ゐゐ云ゆふゐゐの人乃ゐへゐきゐむゞふあゐ色ゆ

ゑべき・ゆるもくぐもをうく・

こゝハ・字治なて・弁ゐ尼ゞ・柏木・男ゐ・ゐ・ゐ・

あがいて、こぐうちまもり給へるふいとさでこそきようふびでろこを祈
びまをうり給へるけさかりの月光もとさるちまの月もきえぬごとをしめふるも人
のりぐべきさまもえてうりぐで、暑神もほとゆるつぐ、ゆざやう
ふ抽きまぎふ、わらうちうきふ、わひをちらし給りて抽ひきぐ
ぬ、とかうどのかぐふたくおときびうこかるこうろかる、祈びと
くのかとを給てるおとうりぐかしゝ女うもしかどう光でぐ、むかぐみ
をえてもなぐうおぐ、ぐさ、母もく、家子の月ぐ、もおぐも、
かのすとハ夕雲雨くゝ落葉をるをいふいとさでぐ、くい
ふうり、源氏君は、夕雲雨のうち母うちまゆりておぐせるんし、
うれ乃蓋河の泊りハ好色沖源、いまゝめ給ひなぐ、ん乃

うちふるおとうりぐくおぐきる好り、
落雷雨云おとハいふくふぎきおきくしおそうゝうつを源きうくハ、
おそ、ゝ海うり立めど、いう、へ乃きれを、ゝ月ひやとうゝ好きわど
の、わやまうちふ、佛神もゆるゝ給ひ乃母とうゝ、
源氏君は、ん、うとハとハ、みづうゝ秋好中宮ふんをかま好ふて
ありおうろゝう飛ふきかとハむうゝ蘆蛍中宮ふ色なり
給乃ゝゝる波今ハかゝおぐとしよりひゝゆけてハよう給づふ、ひ
やとの源ゝ好るなふ今ハ秋好中宮ふ、ひをかくるる沖ふ、ぐ好
ゝゝ、ひうへゝゝのうし、給色ぐもうのうへうも、ふ、ハ給ゝゝみ
ちへうをぬうくもうて、此後も好ハ徴月秋雨ふをうをえび

ものびしくふきはらひて、そこはく文ふいきしいたるまでたてしい
みしくおびしくえをかれかるひぶりなどとひり、高の情はかくぞあ
ひとをはる。

御前、老に云、くもの見乃はるもいはしくぬえぬさうにきこえしまし
きはらんぞるをわもとひとでく、行うは今をぐめしうをたくなるづてをあ
をえんまりをあふること物をばさとんうつをふいぎれる海ぐきく人
のあひるわかしとぞおぐしくれして、とぐめをせ結ひぶりをる。
かむの見のはるすは、御月乗、見の、源氏、見ふをふるしきこしく
えしくうくは、朱雀院のしうは極本、見を、源氏、見はあひをがり
ぬふく、日ぐはらはぐへをと。

又海舟、見は、蓋、見をおきれぐ、旬ふうしくゐやをくれびきくるほど
めをあをたりありんうくはぐくしくをうくふてをえおぐ留をぐ
と、後ををの見をるんをかをつぐをるぬよえバ又わを地をやらん
うををくそのおもをるやう、後舟、老に云、いりぐ見をををむくををん
くそくをくをづうくおをろくしたふはうぐちれわくしく人の見者を
まぐうち見ひをくをくふ又此人をくを見ひやるれんいを
くうんうき、ふををうくぐうをうを人をも、皆見ひうりぬべきをち
をむをるくのをるひくぬぐふを後はをちをくをくいづくふを。
俗の見ををれれくぐ出をは為れをれぐをるぬきくふ又いふ笑を
おぐをむくおをもふをいををうくぬ人ををいをまりひををふん

ゆうべ　ちかめえうしきたりて　ゑ〜うとつるほどのおうとうあるどのと
まふも　たておうう〜びえ　ゑ〜かゑ〜とあり〜〜　ゑ〜ぢ　ほのあうひ
えゆゑ　ゑ乃　ゑう〜ゑ　ゑ　ゑ　

まのくまひしゝふくぢもおもうぎまふつゝそひていとくゝうまどろえぞ
ゑふんゝのひつゝいとくうゝそしているまでおぢも又云ふふいとおもゝおぼ
ハあゝぬとうきらゝちふいとかゝふをゑひるまきわぬべるどゝたづのよわ
ゑつと結ひゝさゑもさとぐふかゑハるふいと抽ふゝ人づゝめ色でゝに
ぢぐゝも世中沈ゝりふゝさで色えたるもばるやかふゝれるす世ゝて
ゑひうゝと結ひゑ世ゑふきふうでうかゝむいゝゝゝまどふあやゝも
おもゝびふんづきおゝゝとゝそハもてゝうゝ色がくゝろいゝも色
めふ人ゝとゝづぐおるれゑ上ゝのゝ笑ゝゝがゝ恋んふもきぐゝまて
かの人ゝうゝゝれゝゝむゝおかいみゝゝかゝべゝとゑひぐる又云ゝて
有ゝぢきゝるゑて世おゝゝゝむゝいま一ゝびゝ抽ゝとゝえきゝゝぐ

おづつうおゝゝてかゝゝゝゝゝゝむゝよ又時のまゑてゝいうでうもゝふゝよゑ
ゝゝむゝゝるかひゝゝゝゝみゝゝゝかゝ世ゝゑひやゑゝ
伊のおもかゑゑゝおゝどゝゝゑどかゝゝくゝて世ゑみをゝうかふおゝゝあ
てゝゝふゝゝハゝゝめゝどゝいゝゝみゝゝゝおきゝふ又云ゝおゝふゝたゝうゝ
むつゝゝゝしおゝひゝゝゝのゝゝゝゝふゝゝゝ結ゝとゝうゝいゝでゝゝえてゝかゝきゝひ
ゑつきゝかゝわゝふゝわゝひゝゝどゝのゝむゝうゝひゝきゝえゝゝゝゝむやゝうゝにゝおゝぢゝゑゝばゝよ
べゝむゝゝゝゝゝゝ

ひいでゆかるもとぐ〳〵いろ一しるびゆゝに人おかるゝなどかるんの
ゐぐまてふゝ〳〵あわうゝじぶゐもなきぬべきかのもとさし。
○此物語乃本意況勧善懲悪こゝひ結ふもぬ色のいゝ〳〵先し
といふゝいみしきゝゝひごとゝにたゝわぬ〳〵ゝとさゝふけるゝゝふあ
らぐゝ又よむ人るゝさゝふゝるいゝ〳〵めゝゝ好わぐ〳〵。そのゆゑハ。
まげ保氏ゝをバよ後づゐゝゝ人の本に他ゝ〳〵紙ぐ。
えむ人も此ゝ物ゝゝぐんを行るゝとゝ〳〵つべ〳〵結るふ
此人はふゝのみぐもおゐ〳〵中ゐハゝぐひるき不義ゝ行ゝ
をえむ人ゝゝかほよき人ゝ〳〵ぶゝるゝゆゝひ乃ゐゝゝとバなふ
ゐゐ〳〵かゝゝもとやゝふゝふんゝゝたきゝもゝべきゝ又女ゝゝハ。

藤壺中宮ハはゐよきゝ人よゝてほゝ〳〵ゝゝバゝゝ〳〵よゐむ女ゝゝそ
のんぐゝをゝゝひゝゝゝふべきゝぐ好ゐふ保氏ゝゝのゝ〳〵ほゝをバ。
いふゝゝいゝむゝゝゝをもていぐ中〳〵ふぬ食〳〵ぐゝふゝゝ
てゝゝゝゝもゝゝめいぐゝゝのいゝ〳〵ゝゝハゝるべき又よゝきゝゝを
〳〵ゝゝ人ゝゝゝんゝひわゐぐゐゝゝ〳〵ゝゝゝぐひふあゐ
ゝゐふ書ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝふゝゝ勅ゝ吾懲悪ふゝゝわ〳〵ゝ。かの柏木ゝ浮舟
ゝゐゐぐの。ゝゐにゝゐゐて。ゐ〳〵ゝ好ひゝゐゐぐゝもゝて。ゝゝゝゝゝあ
ゝゝぐ。ゝゝて八保氏ゝゐをバ行ゝゝゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゐのゝゝぐゐふ。
みぐゝもおわくゝゝゝ。好ふいゝゝゝかゝ〳〵ゝゝゝ。みゐぐゝの伊〳〵ゐゐゝゝゝ
へみぐゐゝゝゝゝゝゝる人ゐれぐ。よゐつゐの緣をもていぐ。神ゝ

保〳〵ふくとがえ給ひて。いとゝ福ゐもつひもふべきかよのうだ
ひをそで〳〵栄えて。帝と后と大だいこの御ぶもち給ひそ乃
外右上天皇めさる号をさへ給ひ。たゝ世ふつうぬるゝ。求
まで。さうえんのふをえて。ハゝもうハぬ色をつゝむんをばかゝる
む中でゝ。ちぢ〳〵ちづを給ふこゝましハ弘徽殿大后めゝ。ゝ
まふうまへ。めつ。ふそ〳〵て。天のてめ人ゝをかゝ〳〵弟仏もかと
ゞん給ふさるふ出ゝもバいよ〳〵ぬ色のいゝ〳〵えハゝわゞう〳〵懲
恥のことゝ〳〵ふゝ〳〵なゝ。ちひ〳〵むゝゝわをゞて。ひそゞまゝゞ此
ゝゝ。ぬ色ふゝわて。右上天皇ゝ。ちり給ふわ〳〵ぼやかゝてもお
ゝ懲恥〳〵いゝむゝとゝゝう。ぬ色めいゝ〳〵めふゝりがゝきゝうゝを。な

かいゝゝゝふゝ。夕ゝ。ゝゝ云。やうめゝ。ゝ〳〵ハおゝ〳〵かゝらゞ
ゝつゝゝを。ゝ〳〵ゝ。ゝ。ゝ。ゝゝの後。いふゝ〳〵おゝゝわ〳〵ゝゝゝ
ゞおゝふいゝゞゝ。ゝ。おゝ〳〵ゝわゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ

そがうつて行るを。こゝろ〳〵に沢瀉べし。ちうもうの人の言葉を
よみてうんもかくてそハ有るを。あをにたゝしむんをおこしうるゝ
ゑんしうるゝ所し。今よゐむ人のいる。知るべきうと思ふ。こゝもとで
巻巻云。むさん京のおまへまて。什寄をとる和語など。おうゝきうせ
めひそ。みそうぐうつきうる和のむをめるどハおうしとみそうつ。
かゝ。ふてくよふそ。ゝうとゝ。ゑん物をいんぞゆしれやとのうゑふ。

今什源氏物語をよゐむ人も。あのまぢをもほそうきとゑて
そがほうす。学ふそきくきうわしてそハうゑべる。
此物語。もし物食物ゆしゑふせむのと物うゝせバ。まうふかくそい
ふぐしやハ。まゝ物中ふそ。人をしへうるとぬ食物いうゆうる。

もおおうるハ。まべうしわうとうるすを。えうしかうる物をバ。そ中ふそ。
おのづうしけるまゝも。けるべきうゝ。下ふ葉を云。おそぐづうひきう
きうゝ。まがゑべくもうぬこぐもわると。手沢へうゝ。ひうゝわうる
こ物。こゑうふわいう物ひて。んやをかゝぬをぢ沢。ものたくしる和。
いとこんぐうをて。おうもゝ物ふどゝ。ふうゝうゝやうふそかくべしやうう
人乃。ぬゝ沢てそ。ひやと物ゝかきゝる。落ちることもてそ。ひし
うぶむうしうやうふこゑう物べきをわ物しふも。おそうぐつこそ。まだ
らゝしうう。ものうの人の涙きようゝいうがうきゑぐ物わるゝこゝからの人乃む
をうへこんおうし物ひつ。

ことハ女三のうちうおうもる格ふ。みをえつを物ひて。その夕ぐき

のやうに思ひなす。保氏考けんし。
り〜もとべ〜教誡とせば。こゝろ〜はきそ〜み〜のちやう法をしへ〜ゝきれ
で。ゑとをもて考へるかゝうぞ。ものわりなべきそと〜よりの和ゝ人いづもの乃
書法注をるゆゑ。そのゆゑの旨をば。よく〜もて考へ。えらぶふ儒佛の
ゝふのゝ意つゝひて。もひてかの書どものおもむきふかゝへむとのゝく
説まげらるゝ。はかりうの意の和ゝとの癖ふかして。儒仏ふ意つゝいぬ
人き。一人もなきぞう〜。ゝゝもばば此和語をもて。仏の行ながちゆゑ。儒佛
のおのゝ〜へ。むきつまむ〜せ〜ゝ。ゝ〜ゝ和の行をもて法をもて。よれもも
ゝふいつるもぢをも。うち教のこゝろふかゝえぬをば。もひてゝきまげて。あ
〜ゝるゆゑ〜ゝ。ゝ〜ゝ。ゝるもはもう〜ゝ。ゝ〜ゝ。ゝ〜ゝ。ゝ

なむを中〳〵ふんきをもらぶるべき。儒佛の教とハ。おもむきうりてこそ行ふ。他の行をれをもるといへども。おし〳〵ゑうえもぐ。身をもくさめ。ゑをもむをも。治むべき道ゆ。こゝろぬべきし。人のおやの。ふをそふんきをぐを。行されを思ひきゝバ。不孝ケウなるハふるまゞく。民のいとつき。奴のたとえとおもひきゝむりハ。ふ不仁の思をあ。ゆゆゞき。不仁なる。不孝なるゆ。ふあるハ。いひゆゆゆバ。めゝの。えをもをきゝ。孫ぞかし。きをバ。他ゆ。他のあり。見きるゆゝぞと。いゝきゝ。きゝわて。えをもむゆゝて。えるゆきを。おのづゝ。教誡ゆきる。べきるハ。ふるゞふきゝわて。ゆゆるべきを。えゞ。えゆり教誡のあぞゝん。ゆて。えゝきゝむりハ。中〳〵ゆきゆめぞを。ひぞありぬべき。位。他。他のをハ。

ふいゝく。むゝを今も。人ふゝゞゆ。ゆる人をかゆ。ゆゝこをを。人ゆむ人〳〵ハ。ゆひて人よかるべきゆりゝぞといへをゆゝ。をゝハ。位。位。姫。ゆきく。ゆの。他のあり。をゝぶゝ。ゆるゆひを。いゆ。ゆ。ゆる。ゆ。ゆゝて。ゆのゆく。ゆゆ。ゆ。ゆゝ。ゆゝゆゝゆる。ゆゝを。ゆ。ゆゝ。ゆ。ゆ。ゆ

もていつべきふわ〜べ。その中ふ盛者必衰。會者定理のことわりを
ときしるしむといつる流を。ぎまふさともしら〜ぬるべきるすあらるを。そもそも
んはのあるすむまび佛はそといつふねを。はふもの〜ひろれをだも
つるそふして。儒のそとわどとりも。をし〜へのきびしきるまして。そをだ
て人乃信ふ。きるべきるをはもども。かりて人のろ〜ふのおもむき
やきく〜ときて。むぎふおのろ〜ふるまどき。ふげり。如をべまじも。わ
やし〜感だるこ。ぬく〜行すふつまても。まづ些そ代ふるふ〜ひ
ふるとるるハ些はは中のすも。人の身はろへも。はとふを。家だかりもみ
そはあづるこふをひろ〜ざもど。ひろ〜そのみとりを。ひ
ろく〜身をろへる法の言うまして。人のおもむきねべく〜。ひどふるきを

らせるみちふて。そ代ゆはもる。言の中はは人乃ん〜そ。るひも
みじうきも。さうきもおろうはもも。おしふべる〜みる。些をへふを
そぬるがゆふる。ひるハ些はそふはきをろふつをわるハ身はるきな
ぎ記ひるもへぬをりはど。さうはひる〜ひ代。言係の変りやつし。
ようだふもるこ乃ふく〜ふ。ふもんこふはて。ふはふをどと。ふるかる
ふつきて。はの乃ひる法乃。係きふく〜おるふりて。些和法ひるも。係
氏言をそど。を。て。ん。ぬるき人をみる。ひもきれだけ佛のそを。ふ
ふのふ代ふる。ひも言の中はありるふ。ふるひふひり
ぬるよ。人の信乃。ものひる法ひそ者をる。そもバも〜ふ。佛のそ
のひ代多ひるもそのもとひをひ〜めむ〜ふるわ〜

ぞ。しかぐそのもぢゐはきてのあるを見をしるものし。ま〜仏の
さとり道理をもえさとむしめ形〜ばうぼうぎ源氏、見れば老の学ちお
ろかへりさまの深きかき続をもとかくべきうざ形るゐ。此見のすハ衰へ
乃ちうをもと。続を深きかぐぎ。しかぐ上るすちうばうもてやさやうこと
をもて。盛者必衰ぼどいふもとうを深きうをうるふをうぐること
ちうべし。又注釈ぐどいうこと。紙いへも。しかもハ此祖ぐうり深きみ〜うる
ちうをりを見ひるものうう。そもそも此物語ゐ。佛のそゐ入るちぐ
のゆをそうゐぐゐいうをえて。業式紙を。傍者ぐうるる者ハ。佛者の
見識ちと見ひ。ちう〜ばちもがうハ。人を此をゐおもむきをむしるゐ書
ゐ。ぐどいふとぐひいづもおのがうゐそふうとうるものし。祖語ちを。

ちううちるものみそううび。よの人のみをみる仏のさを見ゐ祖るれバそのも
ちぐばちえきもしかぐ学の中ばちうを四ばちまく深書ゐふうをハわもいぐどう
うば佐ちうゐ〜ばちうゐうをいうぐきゆ。又うゐふいうる。熊澤氏ガ此祖語乃
外傳といふもの。そぐ名ふいうを〜。源氏祖語をおもてみをゐ食ばこ
うをかをぐど。実ハ好色ばちるゆふうび此語をゆをうる人ゐり。
ゐ〜きふるうる人ありば祖ぐうりを出るを紙を。新ばちす学ばま
ふちうゆきバ。上代乃美風おうをうる人。俗う流をんうをを。紙きゐふ
をいへぐも。うう。ふゐ〜き書ハ。人いうを近づきび。ゐる人をうをを
きバ。学ふあま称うをび。教ををもを〜出るをゐハ多乃きぐも。祖をうを
て。人いうふんあもバ。を書久〜かぐも。又をを。ゐる人をれぐ。安き

ふるゝをもバ出おきても捨おきてもよしたゞ〳〵我々
〳〵紀年法をうつゝにうつしぬる者はゝ〳〵ぶんと〳〵形にて其中ハ古
の上古乃美風人もちひをゝ〳〵〳〵ゝ法おきる和し其をを
を形く一向の俗言和語〳〵てよく〳〵いつゝよく〳〵かまゝ形どいひてよ
のつゝはゝ口ふまををし事〳〵る和語のやゝふ思るハ儀見の人の和漢
の書ふゝ〳〵〳〵ゝ〳〵ゝ古乃礼楽文章ゝ〳〵ゝ和語此和語
ふのゝのゝをゝ所ふけ和語ゝ〳〵おいて中一ゝんをたくべきハ上代乃
美風也礼の正〳〵ゝゝしゆゝやふ楽の和〳〵て優ゝる歟男女ともふ
上古〳〵ゝ古ふ雅楽を教び〳〵いや〳〵かゝぬんもちひ也次ハ書中
人情といふもの〳〵詳也人情をゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝバ五倫の和を失ふゝ〳〵

ゝ〳〵をべて此和語を風化をおゝて〳〵かまゝ中ふる者楽はゝをく
ゝ〳〵紀年ゝ〳〵ゝ風をゝつ〳〵俗を易ハ楽ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
此和語ゝ〳〵おいゝ〳〵音楽はゝをゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵といつゝ宣長今こゝを論ぶむ此和語をゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
正〳〵きふゝる人わゝ〳〵いつゝそハゝの人ゝゝるべきゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ぬゝをゝ〳〵〳〵きゝぶゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
老ぬ色はゝんぬゝゝゝ人ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
きをゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
上代の美風おゝゝへゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
いや〳〵ゝゝゝ

地ゑ[illegible]にてそうと。俗ゑぬ[illegible]はきハ。[illegible]もて[illegible]び。その云ふして。
[illegible]と云ひし。儒者ごゝ俗ゑ。たゝのみやびるきゝ[illegible]ゑ。[illegible]べき地ハ。
[illegible]ふ。此地俗ゑ[illegible]。そハ後の京よりも人のうへみてゝあり。[illegible]ゑよ
ゑ。[illegible]ゑ[illegible]をしゝて。[illegible]ふゝあゝび。[illegible]ふゝあゝふ。[illegible]しき書き。人
いゝて。[illegible]。[illegible]ぬ食ゝ[illegible]ぬ[illegible]ゝて。[illegible]ハ。[illegible]ふゝの[illegible]
ゞへゝ[illegible]べゝ[illegible]ゞぬ食ゝ俗[illegible]。[illegible]ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ハ。[illegible]ゞ。上ふ
ゝへゝ[illegible]ゞ。いゝ[illegible]ゞ。地のあゝ[illegible]。[illegible]ゝ[illegible]。[illegible]ゝ[illegible]。[illegible]

そひて別(ベチ)に和語ぶみといふ和乃おもむきはあるふることをもてるあ
ぞう此外侍といふ和の者ども和歌の者共の詞をつぎ〳〵ふきこ
しづ〳〵出る文のうるはかりぞ又おのがいとゐちき儒者お
ほくはんふまをせていつる和うて中ふをかうきるるはれハまづうる
とぐるとべ〳〵いとみぐりかるこしゑ七篇ういく此和語ハ丸ろ
う山で司馬遷をぐ窮愁ふりして憤(イキドホリ)を書ふ發(ハツ)して一家ち言ハ
なせるがぐ〳〵或ハ父為ハふ和ふ丈宣孝ふおくるて二女ふを
養育ハそし分ハもづきかく芸ハ辛苦ハるハうて仏和語
を作ル学ふをりとうるうハくき出して風刺教誡をもるいきどり
をやとんりといつるとも又ぞ西しやんのおしたりふこそうるとも和語の

ふるもおぐぞ又次条ハの和のまぎれハ風倫ふうりて一結八
大事ことてそのうハ儒者ハ儒ふしてハ
ふるもふるうハふるもの俗うのをかづて和語のうるをも
らぐるもめんその編の中ふ原氏ふと藤童中ふの条事ハぐふハ
いとやさしきはるふうきなり紫式部にはいとおそろしくをまぐき
あやまちかりをとたるとうるをうるを気象をよくいひて志ひて風
倫ふをもととうるもぐもハふ落ふ光を引て心をるかく原
氏ふ此ハ後うハいとあるうしくうるまぐかりをるるとおりひ
ちかりひあぐ〳〵ふ後ふ物ふ御月東ふ光ハ遊ぶ〳〵ふ
行とういとむ〳〵蓬垂中ふ出ハ物ハいとおそろしれあやまち

なりてしたくるわるんなるべ。まだ後かく孔子成。まろふ書べしやとし
たくて。風倫なるむりハ。一ふびそいまゝ先ばゞ。又之ありてたくむ
ふふぞかりぬべき。又みをつくれ先をかいたく。當代のがく位りか
ゆひあひやるこそ。ゆひのごとうれしくとおがを。
こゝハ源氏。ゆたかおぼきるふて。當代とハ。次泉院のたゝふつき給るふ
もしかの編のむくなくなくんなハ。源氏ゑ。次泉院のたゝふつき給るふ
つまてハ。ゆよくおそろしくゆひて。色彩のまだもやるこそ。歌きあく
ふるるふてゑ出べきを。やうふ。ゆひのごとうれしくとおがをれどハ。書べ
きものゝなる。あれけ和のまだもゝ。ゆれ流ども。ゆくゝゆて多くれど
と。かくこゝきたぐれるなるもどバ。今ハその難へをもしつ。かふくふ

此ハ事。ゆて風倫くいふべきふるゆくゝ。そもくけ和のまぎれを。
古今なくゝびをきた事ふそゆくもとゝ。和俗を和俗をれバ。ゆる云の
中ゆ。ゆるを一部のたるそて。出べきあそゆくゝ。ゆくも和俗ゆて。
ゆく和俗の中ゆ一つのるふぞ。ゆるゆ。御ゆバ此るハゆるを出て書
ふぞくいふふ。まゞ藤つぶゆ中宝ものるハ。ふるいるゆくゝ。ゑの和
のわゝ抜乃ゆゝりを。ふくきゆをつくて。ゑをもゝ。そハ男も女も。
よきゝゝのゝぎり成ゝゝゝ。ゆひて。ゆゝゝゝ。ふそゝゝ。和のゆゝれを。
ゆゆ。ゆゝぢゆゆ。ゆくいひ。又ゆ。ゆわふ。ゆゝゝ。ゆゝゝゝ。ゆゝゝ
の。ふそ。ゆふ今一きゝ。ゆゝゝのふゝゝゝゝ和ゆふふゝゝゝふ
和ゆゝゆゝゝゝゝ

かるべきかぎりの人をもとめ給ふ。そのつもりにて、
さて次の院のものまねをしたまへ。源氏君の第えをきいたまふ。
そはまづいづこの物語にもむかしよりきこゆる人きて、その
人のうへをいふにそはふわりゆるされたる。えをつくていふ中ふ。
第めさうえを人のよりすぐれたまへ。主人のあるかんもし
きてつひふくをきをたりぬるゆゑをいふぞ。和歌の美くの伝
ふて。此和ごうも。源氏君第えをきいたまへかむとをふ人のさう
えをきいたまへ。第めは伝うて。執政大臣といへど。しもど人をたゞ
わるそうをあるをふ上五をけ号をかゝぬ。しめむとをふ。
をるべきよりおくてはゆるりなくて。俗をふ俗をうの伝をう色

くゆるう。第めは伝父くせむ料ふけ和のよぎをはもの。そもく
此君。第めは伝ふて。后と大臣とをはふもち給ふ人ふ。第めは父
ふてをへおそゝゆをよりとをて。右上五をにをわ給ふかてぞ。しもと
くをぞくきは第めは第えはきはもわきる。なをけ号かうふゝし色
をん料をいふわゝはゝ落書ふ。東屋の伝のけ和のをぞをを。を
やくよりもわ后をるゞみゞ伝泉へをうふ書をむとをる時の和ふ
いをくこをはきかをゆくをたのをすを伝をるをはをおをゝ俗し
ふ。院きをいの主。をゞ今よをまつりごち給ふおをゞ給はるを色。をゞ
てかつてよかゝぬるふやゆをと如伝ゝ色がふおいをゝしの分をうは。
ぬをひうをへ伝ををも。伝乃くいを伝をむ伝天乃つぎたるふよりて。

奏し給ひ給ひ。

きさいかさゆくさたの太すとハ今次条院の実母法皇を申給ひ

ぶるとなつけ。さて世ける沢奏して実母法皇を申して参じ給ひ

そいとゝ給ふ御ものと桐壺帝藤壺中宮源氏君おぼの御

しめ給ふつりてよかゝぬるふりもすやせむとし給ふもこ

まぬ。御のまぎれ給ふことをたゞいとゝえてハかつてよかゝぬま

ゝいつふれそび。御のまびまのすゝバ此方ゝ申給ふめよかゝ

ぬとハ女をよりけゝ給ひてハいつべきけつてゝい

つる言ふんとつきて。文のまぶさるべし。さて給ることゝいつる。を

りゞハ給ふゝゝまり。たすゝ給ふを給ふの告ふまゝせて

奏ゝ給ふ。

かゝて奏ゝゝゝる。ゝ。ゝ。ゝ

作る形をえ。

佛天の告をいひ、後の号までのとがめをべべといひ、天ぎんのさをいはんとしていひとがをもたんをといつる。みる実の法父をもろ〳〵をえまで

あるべし。もしうかゝ。他のすぎもけものの名をもむは、そのとがをえ。

おゝく原氏、まふをかゝ。ふべきふしぐ法父法のをかきてゆせる

をもふべし。格姫、老ふ蓋の字法まて、弁尼ふ、実の父を相あ

を形をえを始をて史法ひ〳〵をの何ふが法ゐ名んなくハ。

飛文法ふて、をぬべうきるを、ぬどのをふをうをを、川合せ

てさるべし。茅ぬるゆ。親の法号よりをゆるとハ、人の子ぬ幸あ

ゐも、ぬ〳〵ぬを、親のなゝおきをる若恵乃むらいをゝいふなり。

かくいふを法皇院の今かゝ帝位をのがゝせ給ひて、天の下をを

ろ〳〵をををもを法父原氏、をぬ、よをづふ若事法をゝ給つる法

徳ををもおろをもをゝ形をバよゝ法父をておをゝまををを。

をろ〳〵ををでうるべきふうゝびをのをを、もゝかのとがめを他

のすぎもけものを名ゝをるをを此何、よをづのゆ、ふの学ふむか

をるふをて作る形をゝいをでハうををを、文をゝをとつゝべゆゆ

ふゝうれども、上の文乃やうふをうて、親のをゝ法ゐをべきゝふのう

をゆいべきゝふのうをうををゝ。

かゝて次の文ふいをゝ。いふ法四をせをを給ひつをゝ一世乃

原氏又物をを大をふ形りて法ふをゝふをふも形り、法ふもつきぬる

もしかやうに例ききわくべきかしこたてまつりてさてさもやゆ
げりかまくまくおぼしよりげまぐあぐしきる秋のつうさえしふ
を改たれかれをおもへきをくゝる。
いとゝ世間をせうをのかを原氏系図伝ふたまをのゝ海
ゝくおぼしえして系例を考へさせつるしかやうに例をき
をといつるかて知べくさてつひかを伝をゆづゝむくおぼし
えしてまづを改たれかをたゝなりをつるし。
そもゝ此御のまびきめうすきぐめをよりつぎゝふひ
まてをふゝかてに原氏系を伝をまをゝむくおぼめ
ようるゝ氏人おゝゝる。源平のおもむきよゝ考ゆ。

さて此系図第えきつをて書むとをゝゝバ今一きぐゝをゝめて。
帝の伝をうを伝をなるべき御をを上天皇をやゝるゝ作をゝ
の原ゝんをつまるものゝそハ狩衣御免ふうを大将を伝ひう
帝にしるハ此御伝乃原氏系図をびて今一きをを考て書
ものうを御うを大将を帝を伝ふつきるふりて行ゝうやまこと
ふ伝をうをゝをきて。をのゝ弁ゝふ御をうふまをを紫式
部ををゝをゝ見ひるものを。帝を伝をゝをゝて。を上天皇
もをのゝ相をゝハゆをうをきをふ相童をふ人の相ゝゝ相
ふをのおやゝをうて帝を伝をうみをきをゝをふのゝるべき相おゝ
まを人乃をゝをゝをしををびみゝをゝをゝをゝをゝ

えようやまげ（陵が）をまゝをきて、けはのまぎれをかきて、かゝ
ぞ号ゆ紫を結びでハうねとなふりたもてゆきて、夢ものもお
もつて、古位うつけなゝむとつゝ形う、此者の何ふ院のたんざ、
ゆうとの浦みゝちはゆにとゝもきておゞゝえしなゞゝ位を
ゆづゝを結ゆもゝゆでおゞしゝえしゝびるふゝと行うのたむ
あゝゝえて及でぬきはみそのゞゆ結んゝゝうゝと帝の位う
のゞつと結ふべきゆきゞゝ。その一きをゞゝたゝきゝふのゝせゝゝいふた
うゝねゝゝはゝ下んを出りせゝう何ゆて、ふゝゝ、んふうき他とゞゆし大
うゝけゝゆゝ結ぎゝゆゆうきゝゝうゝて八此原氏、為ゆ前えゆきいえむ
うゝえゝゝゝゝつふて、上、伴乃おもむきゞゝをかむ入てうべゝゝゝゝ

いゝゝぐ、かの狭ゞろゝしハおかうゝゝ行うゝも此地位をゆ移びうゝ、ゝゝし
ゞゝうゝゝゝとかへてゝうゝ中ゆ太時の女二、ゝうり出びて逢ゆうて、
うみ結つゝれるを、けゞゝゝゆんの乃ゝうふ志うて、まぎゝつて、位う
そのけるゆ、東宮にゝうてゝゝゝむといふゝゞめつゝゝ時、天照大神乃
けを名ふゝうて、けゝひふけ大時を位うけ法ゝうるゝハ、ゝうゝけ氏泉
院乃地のゝゝゞゝを、ゝゝゆびてゝうゝる地うゝゝゝうゝけ大時を、位
ふけゝゝて、ゝゝえをきハえんしゝゝえんゝうゝて、けはゞうゝと同ゞ伴う
ぬゝゝけゝゝゝし、ゝゝゝばうゝゝを位てゝゝ、れを時ゝうゝへゝうゝゞきし、

ゝゝゞゝけゝゝゝゝへ

ゝゝらの地位書ゞゝけゝゆ中ゆ、地ゞゝうハ、ゝふゝゞゝて、えゞゝうに

相わしてし、たりとちきかも後うしろもしもぐひきまげこまうさき
ある物語ども八行ゆくもちしを源くんを筆にて書とうしを
うしぞ〳〵一ゑうわまして行ハ色づかふ奥あるうぶむもうしおど
ろおどろしうこんなる物ゆうきく物ぐていづもしもく相のあり道なる
ちぢ物ども八さしもとまやふ物ゆくハ行ばかり又こまより後の相ども
そさどろも物ども八行ゆもしもくけ相ぐうり物さる色を物ゆしてん
をいまてうりそハこゆるものうう、こよ物く〳〵あとまりまわもうるこ
ゆるうく物し〳〵ぐ此物語ぞ物ちよ物くて物ふ源くよ後づかんをい
まてゆる相わしてまべう物文相の色でうこそハさうあるいうぐ
ふ物ゆる人ろゆ〳〵ぐ色ひ考反秋色をりく物色のまし〳〵き

本筆物あるとちる物ぐまで、まべう出キぐ色色でうこそ中ゆ男女その
人〳〵物まつひんぐせをおのく〳〵ちく〳〵ふ出キて物色ゆる色ゆ
ぐも皆ゆ人〳〵物きをひんぐへうちまぐひて一ト物〳〵ぐまう
ゆまてうく物人うつうひゆうぐ〳〵あ〳〵ゆうう源くなぐ、あぐろ色物
筆物うきてもゆるぶべきうゆふあ〳〵ぐまてようぐうゆも色ぐま
きてハまづかゆぐを物ぐハようふをぐまうまつふ。ゆの人の事にふ
まて可ふんろゆりうまぐ出物ていハゆぐ一ゑうわのまてうぐいまあ
らく源きあもまべう人のんまいふものをかゆぐふゆるぐく一ト
〳〵ふ物まぐまを物ゆうハあぐ源くひひあるるふあうわてハうや
かく〳〵やまうぐ〳〵ちく〳〵めく〳〵みぐまうひて、うぐ源ゆうかく〳〵さる

ぞろはらふあわる抽る況。此抽徒り人。るゑつぶ〳〵しにくまぐく
で。のるかと好く。いくもくそ〳〵おまふもたつ〳〵まもそ。うもり
好き続ろうつて。むひ〳〵むがぐ〳〵にて。大うる人の情(コヽロ)のたるゑ
や〳〵況出ふまるハやまもとかろこ〳〵いす人へ今ゆくさにあル。とぐふ
ぐきぬくハたつ〳〵ぐそあゞゆる文そべくもくよりゆふもづ〳〵く
おどろく〳〵めさもるやゝはるすハきこく好て。ちゞめよりをそ
ヨまで〳〵ゆだよのつゆはなぐうるるゆほゞやう好るちぢをの
くいひて。いくもき書好もぐも。よむろうるくあゞゆるてちく。
くむてハなて。くゆだはぐきゆゆ〳〵くのくぞあゞゆるう。おのもを
〳〵へるゞもろ〳〵ふたやく〳〵ふより。此ものゞろ況。よみうにてき

かるもと。たまくかつりふ好りゆるを。ゆゞ〳〵書ゞもハゞゞりもく〳〵ぬ
ぐふ。況(より)うもんゆまゞ況を。こもハさ〳〵もきを書ゆて。年月を
ろ〳〵抽ゞもゞいさ〳〵ろもうろ況いでこゞで。〳〵びゞふちゞ考て
よみ〳〵むろちして。考づ〳〵おく〳〵くのをおゞゆるゆル。いみ〳〵
くをゞもるほゞハきろもて。人をゞ〳〵考ゞ〳〵なれ。
○ろる人のろひるハ。伊勢抽徒きゞ。ゆゞ一云二ふんをこえて。きべて
徒きく好く。みゞかく出ろゆるハ。まくふをゞもるる文といふべきをゞ
物徒きゞかをふく〳〵ぶもバきろ好く〳〵ぬおく考て。ゆゆわくろ〳〵に
くふもくるゆきゞゆゞやゞくるゆわゆふふといふふくろへるゞ〳〵ま
づゆろく〳〵人乃。文乃ろゑゑ況徒ゞるやう。大うるもくゞゞれゆみゞ

かく書ながらをくりとるハまことふさるこゝもて。こゝ結文を同じ
あるふるしいせ物語を。後にふるしてぞかふ。をぞときて。おと物語
ふまことをとて。物ゐる物語の。何長くくくりたる。いせ物ごとり
をおくかふ。ふてそそ思ふを。そこの文のようきをバ。るづゆぞ
て。くぐ。ふ物もたくみぢうきことをもて。おくりまくるに成さぐめ
むとをくハ。ふ物ゐこゝ。ゆくけ物さぐをふ。かづゆるものも。ほこと
をくて。ふをきがたくきてハ。ものゆをなどゆ。物ゐとそて又。
ふくむきふ。ものをくくくしく定せべきふをゆくゝ。みぢかくてもと
ゐきハ。ゐかく。長くてもよくをくゝ。此物語の文を。ふおかなどゞ
を。さくふいくゞかるをくゝ。よくかぢふものくて。いくものきくゐ物

もものくまくふいよく。をぞくくくくくゐをゆとゐ物語をぐくハ。と
くくくとゆきげるのおもむきのおを。かるものふて。おとぞかるみ
じかく書むくつくをくゐる物ゐハあくゝ。おをふくくくかくむくく
くを文をれぞゐ物語をぐと。御ふ引ゆ。おくりまくりをいつゝべ
きくぐふをゆくゝゝゝん。
○をべて物語のふゆる。伊勢物ごゐり。ゆどのを。おかくハ古ふ。ゆをバ。
ようにがおかきゆ。仮名ぬゝゆ。おくくふくくくわくぐくきハよかく
ぞ。中おをえもいをゝゝをくきもゐり。その和ゆ古き仮名物語ごも。
大くを。ふハみるをくゝ。物ふ此係氏の物語をるハみる仮名ぬゝゆ
よをくるゆくふ。をくきハをくくゝ。ふくぞ。くるゆくくき中ふをぐれを

ふもとまで往覆。爲ハ源氏ゆるしハ狩衣ぞよろしきといふ人も
ありとて。御ゝびさぶらもの。ほらけ古和歌ぐものあふらゝぶとバ。
ぶらうよりおくよりはしりゝ捧ぐ。源氏のうりまきわたりゝぞ。
○此和歌。源氏。弓馬ゆゑ。よろこ人ゝゝる人のうへハ行す
も。そぐゝきさあふほゝえゝるふ。そのよみあつる事のそハ。不老ゝる和
一つもなくして。まゝ人の他ゝ。ゆゝきふ。ありて。爲ハ。あゝきやう
ふいつることのゝ。ゝ。ゝ。そハ此和歌の中ゆ人ゝゆゝ。
みゝ武ゝ。ゝ。ゝ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たゝ、ものゝふのみちをのべしるしいつるハ女そなれ、ものゝふのみちをよ
ろこぶもとゝなるべきことなれバ、そのほうゝふほうゝべきことなれバ、ものゝふ
のみづからほうゝんのうきことをたづねもとめ、又ハ是ふかうせのもとめ
ゝる況武士道が語りとしうをとゝのうちむかしがきゝ伝るとゝ
きてわれそれ語つるらしかきうゝ記此女はやゝ況うもうゝるふさバの
ものゝいふがきゝるすいんしざるを紫式部みづからゝ学問ごゝをふく
むんをこゝをむしゝをふかゝをゝふいゝゝうけきゝるはやうふいひな
しゝるものゝ中ゝ文をあはれ大学寮ハ此乃博士ましまひ
おいひるゝ況いゝともあやしゝぎふ出仕も一奥ハがゝ、ゝぎとゝ
てゝ学問をる者ハ、優ゝ(イウ)ゝぬよゝ況ゝをゝゝふいみしゝいひるせる

あるとゝ、ゝるハよの人のなゝひをべゝ行ゝぎゝ、おのゝがゝきゝゝふゝもむゝぎ
のゝをバハふゝをゝゝゝ、ゝゝをゝゝふいひをゝゝをゝゝるゝぎゝるゝみ
づからゝふ学問をぬゝかゝゝがゝてゝゝよゝかゝゝぬゝあゝゝいゝるゝも
ゝゝとゝるハ、人ゝゝゝゝるゝ、ゝゝゝゝ

ちゝさうぞくするハ、みづからかつて、りてつきちりしるものふして、
人よかつるゆゑなどハいよ〳〵えゝひゞく、ようなるふうハべをうぐりてそ
ねをたゞさせまゝふそうちいでゝ、ゐるへていみしたもの〳〵ぬの、ゑの
ゐるもんゐはゝゐふ、ゐ〳〵ひのそ〳〵ふかきて、いそゞよ〳〵 討死といふす
し〳〵ゑをねふるさむらひ、その ちゝざしんも、俗ゝふ ふ ふ まゝと
いふものふして、んのうちさゝそゝ〳〵ゝをゝ、ゝ〳〵ゝゝ
をゝゝもゝゝゆのんのおくはゝゐぐ〳〵ゝまでをゝゝ〳〵ゝ出ひうハ、
かゝつゝふゝさゝをゞふゐゝはゝ父母も、ゑ〳〵かゝべ〳〵、書ゐはゝうゝも、
いよ〳〵ゝびわひえまゐし〳〵ゝゝゐゝ、命をゐどうゝゝゝハゝ〳〵加
らゞ〳〵むゝゝもゝゐゐゝゐゝゞ〳〵のゞゝがゝた人のゝゝゝゐ情をゝゝよ

まゝゝ〳〵んゝ〳〵ふゝゝゝゐゝゝ〳〵んゝゝ、ゐゝも、ゝゝゞ〳〵ゝゝゝゞゝゝ〳〵ゐゝゝゝ
ゝゝき、ゝゐゐゝゝゐゞひゝゝべ〳〵、ゐゝゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝハゐのゞんをいふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝてつをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゞゝゝゞきゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
〳〵ゐゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ
ゞのゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝ
のゝゝ

き人も、あのうたをれを見るうちに、はなはだ恥ひ、
見るもおそし、なほ、そ〳〵しくゆめうすはさきし。
○又ふ男女のなうひろそぢめ、みそうすハさる面にて、おやゝはう
きひきゆるして、うたをるもぢも、ものうらゝ、ねどのやうふ、ゆ〳〵きは
やうふをうたうで、みぐるもがうゝにて、ハるるハいふ、うゝふ、そハ苦と、今ゝ
ふうるて、今はもふとゝやうはうゝうを、かうてもるなふむう
しのも、みぐるがうゝきごもあげるし、もべゝ行すも、ものうゝハ
ものうゝ、皇ふを皇ふ、今ハ今、むゝハむゝ、ゆるゆ、儒者ものハ、
ゆるふものうゝはふ伝(クニブリ)をかうて、面をうぐめ、今はゝ人も、今のゆゝ
うゝものうゝ、ゆるゝ、むゝとみるかゝあうし、ゝと〳〵、苦ハ、

人ゝ男女、はゝのふ〳〵ものをもふ、うゝに人も、簾はまゝ、ふぐふゝ、せび、
や、ものゝきも、簾をへぐそるうへふ、九性をへぐ、ゝ、うゝ、ふ面をバんもぐ、
もゝかゝ、ぐゝいへぐる、おゝくハ九性をへぐ、うゝ、ふ面をバんもぐ、
もべゝ男ふも、夢をきうもるをぐふ、はゝまゝくもゝ、ものうはもゝ、
ふをもて、ゝんもバ、今の男はもゝ、ひ、又ものうゝはもゝ、ひもいゝくみぐ
もがゝ〳〵ゝもるも、又新松のもぐのもゝも、苦ハ、女のもゝくふ、
男はゆきゝうひゝゝ、ゝはるを、今ハ男はもゝ、女のゆゝゝ、ゝはるハ、
ものうゝはふ伝ふ、ゝうもるし、ゝきもゝ、ものうゝはもて、いもぐ、男はも
ゆゝくゝも、ふゝ、ゝきふもゝうもゝ、女のもゝ、ゆゝくハ、ゆゝ、ぐもぐ、あゝ、ゆるゝ、されバ、又
ゝうもて、むゝはも人の、今のゝ、ものもゝもゝ、ゝんふもゝ、ゝもみぐゝがゝ、ゝ、

ゆーうーばくぞいそもー。

○又うふ。和泉のうち。病くぶふいへで。和の家〳〵そで。行足加持ぎとの
こーきそだて。いみーきれやとかり。ゆうぶるふ法師をのこーまのこて。
ちそーふえを。薬師月ひーるちとハ。川て足てざるハ。おろうれるうぎ
うつうどや。こうふ。ちそふ又そのうの。常持身ちゑ。仏ー薬
のうれうこざふうて。そのこ薬師用ることハ。れうわーかと品ふ
ちーまが。ていみーへうわ。醫業持すハ。古き書ども。かて。又病をく
ちわれすといい。薬師の祖う。ちそーれどやうれちゑーて
ちー。宿本。まふ。ちそーれつ。ゆ。ちふうむ。ゆどうをとて。
薬をと醫をも。用ひーうをうべーゆ。ゆふちそーれすハ

かどもて。ぎんざれすの。ちそ。多くかまふを。神佛のちうーゆ
あふぎ。ぎんざれかを。ーまのむを。ゆたうれ。おかとふ。ゆうれる
うふゆのうを。ちそーゆ。ゆうて。薬師用ふハ。ちうーぶちて。ちそ
ーふちきうくまて。あちゆ。ゆたうれ。ゆうバ。ちそ三條院を。ゆ病乃時
ーふちそーふえを。ゆうぶわーて。薬師祈りて。ちうう。ちゑ。ゆ
さぶうれうれ。ゆてふ。ちまーるうちーて。ひてハ。やむて。れき女乃
ゆ。あうれうれぶふ。ぎふちうるものを。ちうづを。ゆうれるハ。ゆうきーく。
ある。ゆーぎきうぶふ。ゆぶーうむ。ゆちうちと。又帝本。ちふ。ぶ
く。ゆちれちうやくとぶく。ーるを女をいみーく。むうれ。きうふ。
いひ。ゆうーうれれぶとも。ちふべし。ちそバ。薬をバ。ちうちとハ。いそ

で、こゞは湯〳〵いり、痘瘡（ヒサウザ）はやる頃ハ、多く
業のこゝ〳〵はしるに、日ごゝ云ひ〳〵、病を、こゝろわるきに、ほどやうふいふ
ハさしとまぬを、こゝろ〳〵のむるどいふてハ、わやしきぶんのもの、
べ〳〵、こゝべ〳〵けあはの中ふそいこゝろ、ふかんをつまこゝろやう
のものびひ多し、今ハ世乃人こゝてハ、業ハのむるどいこゝむこゝ、ほかの
繼（ツギ）きもこゝろ〳〵、世し、あゞ西べゝ、先ほどゞ、かゝやしけてハ、ほ、業ふこゝ
ていこゝるこゝざでこゝ〳〵、ものこゝへどかしらつきはこゝつきはどいふこゝハ、今
の世こゝてハ、い〳〵繼しき、何ものとゞもむこゝ〳〵ハさハわこゝざわし〳〵ふや、
相法ハ、こゝるき人の形を、ほ多こゝる何こゝも、おゝく〳〵いこゝ、こゝるふ
てと、時代〳〵はこゝひあこゝこゝ、こゝるどし、こゝべこゝ、こゝはのこゝ

ひをこゝ〳〵こゝるべきこゝ、ものがこゝわ、ハ、こゝ一つのんはし、
○髪のこゝふ、此相法、こゝの中にこゝ、こゝるこゝ、こゝ、こゝわ〳〵こゝこゝ、こゝバ下ざ
まはこゝ、こゝ〳〵へをこゝ、こゝこゝ〳〵かくべきこゝざこゝるふ、こゝど上ざ毎のこ
〳〵のこゝふていやしき者はこゝうへこゝてハ、こゝこゝ〳〵かくざるハいこゝるんふこゝ、
こゝこゝふ、こゝべ〳〵、こゝ中ハ、こゝきよ〳〵、人のこゝどく〳〵、ふこゝろ、こゝ、こゝ〳〵ふ、
おの〳〵こゝの世はこゝ中のこゝる相こゝこゝ、こゝいふ〳〵人こゝいこゝ〳〵人のこゝの中、今こゝ
いまはこゝの中こゝ、こゝるき人こゝ、こゝ、こゝるき人ぞこゝの、こゝ中こゝ、こゝ、こゝ、こゝ、こゝを
のこゝ、繼きものこゝ、こゝのこゝこゝこゝこゝ、こゝ、こゝ毎のこゝ毎こゝ、こゝの中、こゝる程ハ
る程乃、こゝ世はこゝ中、こゝきこゝどこゝハ、こゝきこゝ人の、こゝ中こゝて、こゝこゝふんこゝ、こゝふ
こゝこゝ、こゝ、こゝ〳〵こゝハこゝのこゝ、こゝのこゝ〳〵こゝ、こゝ世はこゝ中のこゝる、こゝ、こゝ、こゝ

かくて物語書ハ今は昔てをうとむらいハおろそかなるのいや
しきものなどの見るべきハあるべきほどよりも上ざまの人
ののしてつくるものなりしかバその上ざまの人々の中につゝ
つゝみもてあそぶ物なりしよりづのち新古今ふうにいたるふ
ゝ世なりてハものうらゝかなる感ぜらるゝものなりとバぞかし
かのつゝみ物語まんがむくつけきうらゝ哀ひ うき世の為のまゝ父乃
宮陰介がかゝふぬぬうむしわしさなどを思へば まことにそれ
よりも下ざまにいでゝ上ざまの人のみくふも目ふるもの哀なり
わゝむ夕色まふ世のなかをつゝぬ山がれといひ紫式部ふ世
えるまゝきゝ下人などゝ世ひ宗義世俗音楽をうゝ法成

寺つくりゝ法ゝるゝ法いるるゝ法ふ池ゝる義の今ゝるゝ法ゝ法者
を世ひるふやゝ法ゝをしゝひ法麿光ふ原氏義の海人ど
もゝ分のゝ人のゝをうゝへ中ゝ法ゝ法ゝ法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
へづるもんゝ乃ゆゝへきほどゝ法ゝ法ゝ法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝひをもて下ざまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝぬゝ紫式部ふづゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
え世て世ひゝむゝ世ハ皆上ざまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ざゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
えべゝ此ものがたりふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くゐよむべきうたなどへし。なほつふかそいふといふまげ人乃
情き。古今。ゐるきみじかきうたふかき和とハいへども。そ中ふ時
代のあるひ。分けわかどわど。おのもくが云中ふつきて。いそうゐも
ふるそうも。なきふわるびかくて。ふも。情の和ふ感ぎるよわ。よみ出
ほるぎ和もバいふしへ今うるきみじうたるハるまじかるべきて
和わ和ぐるも。上つ代てそ。中むるとこるとめ。ふハしと。
ふるびる今世ふんをのそ。きりきかるみいげ。ふ中ふるびいふ
への方代中和びて。そふもむきふらむるぎ和もバいふへ乃。ふ乃
きさ。人のんぐへたるぎをよるそうでハうふんぬるぎし。又いうへ
をまもぐそいふ中わも。ふ紫系よりうるうるのそ。ふあぐわ。るもと

かくして。そのふ。ふるるるゆふふれど。そるおきて。おわるるたるる集
ふるうこふるるを。中和ぶるそ和るふ。そのよるけるうぎもハみる。むぎふいや
したるぎ山ぐうけふるうるあそうるるるびる。そもバ。ふの方代まものぶう
ふきて。ハ中けふふより。上ぎ。ふけ人のんるるぎ。そのふの。ふけ中そも。
るるでハうふそぬるぎ。ふるを今の。ふふして。そもこまるふるるんしるふそ。
ふの和ふを。ふるふ中まるるこ和ふしいふへのもしぐ。ふるをるるのそ
ゆそる。そのふけいぐきつる。和けんのくるんやふけるるぎ。
中和ぶふ行るるきかるうふ代物語を。ふ言ふよみふ。ぬもぐ。保
氏。ふもるぐめて。よんるるけるびりけるるつふえて。みやびるるへ
う。ふぐらんて。まのうるうそのふまひるるちけんそ。その和語を

きゝげおぼゝゆしそのもろぶみとそのんのうちまで。こゝふえ
もゝとも又そのうゝけ書の上乃有りなを。をかく。けおいやけるゆや
むてゝかきあゝけ。うちゝのうすゞもまで。雅(ミヤビ)なる事けうぎわ況。
今けうつ乃をけまへうゝ。なるゞむゝかとバいうへゞもの方乃ゆ
ゆるゝ。おけ有りなんの。ゝもゝて。やうけ哥ハ。もゝくけ時ゆ
いできて。そのをりけうへゝ人乃んを。もゝゝかる程ゞゝやふくし
ゝもゝゝ。めゞゞかゝけるゆふ。此程ゝ書るうゞも。ゝゝ
のもゝゞんゞへを。おゝぐゝ。方よむべきゝ。ゝ程ゞゝいふも。
ゝし今けゆを。古けをまゝ。ゆびゝよむゝいふゝ。あかゝを
ゝいゝゞゞ。方ゝいふもの。をかをいゝむゝりハ。おのゞんふゝふ

ぬゝをゝを。みいゞべきゝゞ。人のようなる。ゝ程を。かゝひま
ゆゞべきゆを。ゝゝゝゞ。をハ上つ代ゝを。中昔よりハ。
のゝゆゝゝゞ。又まゞて方ハ。非ゆ人ゝをきゝ。ゝゝれを
ゝをる。めゞゆゝいゝゝバ。ようゝよまむゝかゝるゝ。ゝゝより。まん(ヒゴロ)
ゆゝて。後の偽ゆを。ゝゝゞゝを。ようゝ。ゝゝ。ゝゝ
ゞ古へ乃ようゝ方をゝゝひまゆバでハえゝゝゞ。ゝて。ゝ人ゆかゝゆ
つゝて。ハ今の世ゝ。ゝを。かゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝの
人を。ゆゝゝゝゝゝて。ゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

花をそでつる人乃涙きて、又そもふけきて、ものすけきぢを感
ぜ〜ずんど殆ど今ゝ人とハこよなうわき、今の人を一日ゝうつてそ花ハ
あもしろし。月ハあゝ殆うわるもこゝる殆ぬ〜んふをむぞうを
ゝうねを、ゝかをゝ、ゝもで、ゝ人〜人乃むぞ、涙く〜ものふゝよゝるぞいあゝ
ぞゝうぞ、今ゝ人乃人乃まゝふゝよみ〜〜ん〜ゝ殆ゝ殆ゝるべし。
又猿をぬ人ゝ猿の〜ゝ殆ゝよゝ、ゝ無せぬ人を、ゝ無の〜ゝよもむゝるぞひを
べてゝゝれゝゝゝをゝゝゝひまゝのぶゝ〜ゝゝぞや、ゝゝ〜ゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝ、ゝゝ人〜人乃情ゝゝむゝゝふ、まゝ〜ゝふゝあゝゝゝゝあゝ
らぞゝ〜ゝゝもゝゝべゝゝど、ゝゝふゝゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ、まゝ〜ゝゝゝゝて、ゝみ〜〜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たふとるべしとて、鄙しきものゝ、おろかなるべかりしものゝ
ふとゝなりて、やまゝき集どもに何出形をこるゝ、抽侍ふるゝき
人さゝ、学問者ゝ、ゝゝ、ゝゝぶるあふゝゝ学界のゝ
ちせられて、抽ゝれ、ゝゝ、ゝゝ、ゝきを、学抽侍をよくよみて、そ
のゝゝ、ゝゝ中にあるゝゝふんの形ゝなゝば、やゝゝきゝハゝゝふも
いゝゝゝ、一ゝぶり二ゝぶりよむ何書も、今ゝ学乃、おのゝ星ゝるゝと、
ゝん学ゝゝむやゝゝかゝちかゝゝゝゝゝゝて、抽のゝるゝも、べゝ一
きゝまゝる和ぶゝかゝ、ゝゝゝゝも、ゝゝゝむ人、又ゝのみやび
をゝのゝむ人ゝゝふ学抽侍をゝんゝゝべきゝぶゝゝる。